
独占欲

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独占欲

【Nコード】

N3661G

【作者名】

飯野こゆみ

【あらすじ】

今年こそは。それとなく相手に伝えたい。今年こそは。あいつを手にいれたい。そんな想いを秘めた2人のとある1日です前編、彼女から、後編彼からの視点です

前編

「チヨコなんて甘ったるいもん好きなわけないだろ。お前らもそうだよな」

周りの男に同意を求めているあいつ。

机の中の小さな箱に手を伸ばしかけたその手を咄嗟に机の中から手を引っ込めた。

私の全神経はあいつの言葉に集中して、思わず息を止めてしまっていた。

黒板を目の端に映しながら、あいつの言葉を反芻していた。

チヨコなんて甘ったるいもん好きなわけないかあ

行き先を失ってしまった机の中の小さな箱。

あんまり大きすぎても変に思われるし、あんまり高すぎて引かれても嫌だ。

日頃の感謝を込めて、そんな感じて渡せばそれが一番だと迷いに迷って選んだチヨコ。

他の子よりはちょっと近い場所にいるんじゃないか？ そんな淡い思い。

幼馴染といえば聞こえはいいけど、ただちょっと近くに住んでいるそんな関係の私達。

男とか女とかそんな感情は全く持っていなかったはずなのに、中学に入り急に伸びた身長や声変わりをした低い声。

そんな彼に気がついたのは、私じゃなくて周りの女の子達だった。

カッコよくなつたよね。

そんな噂話を聞く度に、少しずつ焦ってくる私がいた。

その焦りは何だったのか、初めは気がつかなかったけれど、今でははっきり分かるんだ。

そう独占欲。

私だけが知っていたはずのあいつのことが、みんなに知られていく。何の食べ物が好きだとか、嫌いだとか。どの映画が好きだとか。

あいつの興味のありそうなことを調べていく女の子達。

その情報源は私だったりする。

こんなこと教えたくないのに。

私だけが知っていればいいことなのに。

それも言い出せずに、部屋に帰って唇を噛むんだ。

力を入れ過ぎた歯が、少し唇に食い込む。

右手の甲で口を拭うつつすら赤い色がついたそうあの日。

私の気持ちに気づいた日だった。

とうとう渡せなかったチヨコ。

だけど、あいつチヨコが嫌いだななんて今まで聞いた事は無かったよ。うな。

去年だって、貰っていたじゃん。

なんか、俺に渡すなって釘を刺された感じがした。

一人で歩く帰り道、風が運んできた砂ほこりが目に入った。手袋をした手で、目じりをこすると自然と涙が頬を伝った。

勿体ないから、兄貴にでもやるとするか。

兄貴にやれば、3倍返しして貰えそう。
無理にテンションを上げようとそう呟いた私の後ろから突然声が降ってきた。

びつくりしたなんてもんじゃない。私が教室を出る時にはまだ、話をしていたはずなのに。

そして何？ 勿体無いなら俺にくれって。

甘ったるいのは好きじゃないって言ったのはあんたでしょ！

そう言いたいのに、咄嗟の事で声が出ない。

気持ちを落ち着かせるため、深呼吸しようと思った瞬間。

頬を撫でる冷たい風が――止んだ。

変わりに唇には暖かいぬくもりが。

手袋をしても指先まで冷たかったはずなのに、頭のとっぺんからつま先までもが沸騰したように熱くなるのを感じた。

一度離れたあいつの唇は角度を変えて、また私の上に落ちてきた。

ついはむように、何度も何度も。

突然の出来ごとに驚きすぎて、頭も体もついていけずに固まるばかり。

そして、今度は耳元に。

小さな声で囁かれた。

「これから、お前が渡すチョコは俺だけな」

まだ固まり続けた私の身体、唯一心臓だけが大きく跳ねた。
すると、

「返事は？」

と催促されてしまった。

余程の緊張のせいなのか、出したくても声が出ない。

言葉の変わりに、大きく首を縦に振る。

恥ずかしすぎて直ぐに顔をあげらず、赤茶のローファアのつま先をじっと見つめた。

そして、ゆっくりと顔をあげた先には、悪戯っ子のようにニヤリと笑うあいつがいた。

後編

あいつ可愛くなってきたよな。

中学に入り、急に髪を伸ばし始めたあいつ。

お転婆キヤラだったあいつが吹奏楽なんて始めて、少し大人しくなった途端に周りの男どもがそうやって囁き始めたんだ。

可愛くなってきたんじゃないよ。

元々可愛かったじゃねえか。

そんな事は口にはしないで

そうか？

そんな言葉を返している自分がいた。

教室で何人かで話していると背中に感じるあいつの視線。

この中の誰かに気になる奴でもいるのだろうか？

もしかして、あいつもこのうちの誰かに……

そう思うとやるせなくなってきた。

少し声のトーンを上げて、あいつに聞こえるように言ってやった。

「チヨコなんて甘ったるいもん好きなわけないだろ、お前らもそうだよな。」

お前らもそうだよな。その一言を大きな声で。

俺の声に圧倒されてか、皆頷いている。

だから、チヨコなんて渡すんじゃないぞ。

心の中であいつに念を送った。

少しして、あいつが席を立った。

一日中監視していたわけじゃないが、きっとあいつは誰にも渡して

いないはず。

そして、今年もほっとする自分がいた。

あいつが教室を出たのを確認して、会話の切れ目のいいところで俺は仲間に別れを告げた。

このくらいの時間なら、俺の足だと公園位で追いつくよな。

仲間との会話は上の空で、そんな事ばかり気にしていた俺。

いつもの帰り道を少しだけ早足で歩くと、前に歩くあいつを発見した。

やっぱり。ぼーっとして歩いてやんの。

気づかれないように、そっと近付いた。

突風のような風が巻き上がった次の瞬間、ちらりと見えたあいつの横顔。

涙が一筋頬を伝っていた。

何かあったのか？そうは思うが不謹慎かもしれないけれど、泣いたあいつの横顔は俺の目に焼きついてしまった。

子供っぽさの抜けた、少し大人のようなそんな顔。

そして、あいつの声が聞こえた。

勿体ないから、兄貴にあげよう。

きつとチョコだろう、続いて聞こえた3倍返しとの声。

自然とあいつの真後ろに立っていた。

「勿体無いんだったら、俺にくれよ。」

口が勝手に動いていた。

直立不動で立っているこいつ。

口を金魚みたいにパクパクさせて、俺の顔をじっと見ている。

そして、あいつの口はぴたりと閉じた。

俺の口で塞いでやった。

全身に鳥肌がたった。

その唇はとても柔らかくて。

嫌がらないのをいいことに俺は何度も何度も唇を重ねた。

羽根のように優しく、ついはむようにそう何度も。

段々と貪欲になってきて、自分にブレーキが掛るか心配になる手前で惜しむように唇を離れた。

顔を上気させ俺を見上げやがる。

爆発しそうな心臓。あの唇をもう一度味わいたい、味わってみろそんな囁きが頭で響く。

必死でブレーキを探し、こいつの耳元で俺は囁いた。

付き合ってくれなんて今更だろ。

遠まわしだが、分かってくれるよな。

返事を促した。自信がなかったわけではないが、目の前で大きく縦に首を振ったのに安堵した。

思っていた以上に事が上手く進んだ。

あいつから言葉は貰えなかったけれど。

あの後も妙に照れくさくて、何事もなかったかのように、あいつの家の前で別れてしまった。

一人部屋に戻り、あいつの唇を思い出して背中がぞわりと疼きだす。

そして、今日一番の失態に気がついた。
チヨコ……貰うの忘れたと。

制服を脱いで着替えた俺はコートを片手に家を出た。
チヨコだけじゃなくてあいつの言葉も一緒に頂いてきますか。

そう今日は2月14日なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3661g/>

独占欲

2010年10月14日23時46分発行